

## 西洋と日本の怪奇小説

——人面痘をめぐる短篇小説，谷崎潤一郎の「人面痘」を中心に——

金 井 公 平

## The Supernatural Stories in Western and Japanese Literature — "Jinmenso" by Junichiro Tanizaki —

KANAI Kohei

Jinmenso or Jinmensou means a tumor which takes the shape of a human face. Kotaro Tanaka, an excellent ghost story writer, wrote "The Story of Jinmensou". The model of the story comes from Kaireizatsuki. In the beginning part of "The Story of Jinmensou", he refers to "Jinmenso" by Tanizaki and says that the story in Kaireizatsuki must have been the model because the subject of jinmenso is so rare. But the contents of these two stories by Tanaka and Tanizaki are quite different from each other.

Actually the subject of Jinmenso is widespread, and there are so many stories about jinmenso not only in Japan but also in other countries. For example, Ryoi Asai wrote "Jinmensou" in Otogiboko (1666), a translation of Sentoshinwa written in China. Seishi Yokomizo, a detective story writer, wrote "Jinmensou". Osamu Tezuka, a comic artist, also drew a story comics of the same title. Edward Lucas White, an American horror novelist, wrote "Lukundoo" and Henry S. Whitehead, influenced by "Lukundoo" wrote "Lips".

The stories of these works are quite different from each other. But all of these works deal with Jinmenso, and, in most cases, jinmenso is a symbol of woman's grudge against man or the reverse. Jinmenso grows and begins to speak. The Balunda fetish-man in "Lukundoo" develops into a perfect miniature of the upper part of a human body. Developed jinmenso is basically parasitic another personality living on a person. Jinmenso as another personality can develop into the other self of the person or the other one of dual personality.

"Jinmenso" by Tanizaki is a ghost story about a silent movie. It is a new type of ghost stories, since it deals with supernatural aspects concerning not only characters, but also techniques, production and even supply of a movie.

The Japanese title of the movie is Shunen, the English one being The Tumor Which Takes the Shape of a Human Face. In the movie an ugly beggar loves a beautiful oiran. But the oiran hates his ugliness and rejects him. The beggar throws himself into the sea resenting her cold treatment. Later on her kneecap a tumor forms and gradually takes the shape of the beggar. He begins to speak and encourages her to

— Abstract —

commit many degrading sins. Finally Jinmensou exposes his face to her husband in the midst of the party. The oiran commits suicide soon after that. Thus the jinmensou completes his revenge on her. The last scene shows the jinmensou still laughing even after her death. Although the story of the movie is rather hackneyed and far from reality, the scenes of it, especially concerning the techniques, are quite effectively described. We should reevaluate Tanizaki's "Jinmensou" since it reveals his excellent sense of movie.

## 〈個人研究〉

## 西洋と日本の怪奇小説

——人面瘡をめぐる短篇小説、谷崎潤一郎の「人面瘡」を中心に——

金 井 公 平

## I

人面瘡、あるいは人面瘡とは人体にできる人間の顔をした腫物のことである。谷崎潤一郎が大正7年3月に「人面瘡」を発表しているが、四国出身の作家で、怪談の名手といわれた田中貢太郎も「人面瘡物語」という短篇を書いている。その短篇の冒頭で、田中は谷崎の「人面瘡」の原稿を、ある機会から入手し手元に保管しているが、題材の珍しさからどこかに粉本、つまり参考にした本があるにちがいないと思い、資料を注意して調べていると、『怪霊雑記』のなかにそれと思われる話に行き当たったと書いている。幸若舞の家元、幸若八郎が京へのぼるとちゅう、木曾路で出会った奇怪な出来事の話である。田中はそれをもとに「人面瘡物語」を書いた。しかし谷崎の作品と比較すると、具体的なストーリィは全くといっていいほど違っているのである。少なくともストーリィから判断する限り、谷崎が『怪霊雑記』を粉本にしたとは考えにくいといえる。

このグロテスクで特異な人面瘡は、一見いかにも珍しい題材のように思われるが、実は同じような題材を扱った作品はこれまで日本にとどまらず中国や米国でも数多く書かれているのであって、古くて新しい題材なのである。だから田中貢太郎の言っている粉本云々に関しては、もっと慎重に考えるべきである。粉本としての『怪霊雑記』を私は現在探しているが、残念ながらいまだ見つからないままである。しかし人面瘡の話は、江戸期に浅井了意が書いた中国の剪燈新話などの翻案である『伽婢子』(1666)にも載っている。農民の股に人面瘡ができ、諸方の医師が「本道(内科)、外科、皆その術を尽くせども験なし」という状態で苦しんでいたのを、諸国行脚をしている仏教修業者がさまざまな薬草を使って治癒する話である。また探偵小説作家横溝正史も、名探偵金田一耕助が登場するシリーズで「人面瘡」という短篇を発表している。さらにマンガ家の手塚治虫も、ブラック・ジャックという天才的な外科医が登場するシリーズで、同じ題名のマンガを描いている。谷崎同様、映画制作に一時執念を燃やした経験をもつ手塚が、人面瘡に魅力を感じ、題材に取り上げたことは興味深い。最も新しいのは第六回日本ホラー大賞を受賞した岩井志麻子の「ぼっけえ、きょうてえ」(1999)である。米国ではエドワード・ルーカス・ホワイトが「ルクンドー」(1927年、昭和2年)というアフリカ大陸の奥地を舞台にした作品で、黒人の魔術師の人面瘡を描いている。そしてこの「ルクンドー」の影響

を受けて書かれた、ヘンリー・S・ホワイトヘッドの「唇」(1944)という作品がある。これらの作品の他にも人面瘡を題材とした作品は探せばいくらでもあるであろう。

これまで挙げた作品のストーリーはそれぞれかなり違っているが、人面瘡あるいはそれに類するものが登場すること、そして『伽婢子』のような場合は別として、その腫物が怨念、とくに男女間や双子間の怨念がこりかたまって生じたものが多いのが特徴である。横溝も岩井も生まれることがなかった双子の片方が人面瘡となる話を描いている。手塚は人面瘡を二重人格のテーマと結びつけているが、それは横溝や岩井の作品のテーマともかなりの類似性を持つ。「ルクンドー」や谷崎の「人面瘡」には、『伽婢子』の素朴な腫物の段階を脱却した、いわば進化した人面瘡が登場するが、それらの場合にも二重人格や分身との関わりが見いだせる。

「ルクンドー」には女性も直接登場してこないが、魔術師である黒人の人面瘡が突然英語で話しだし、寄生しているストーンに、二度も離婚したストーンの妻が永久に彼のことを許さないと告げる時点で、女の怨みが関わっていたことが判明する。ホワイトヘッドの「唇」では、奴隷船の船長が、小声で「ルクンドー」とささやくイボ族の女に首を噛まれると、その噛み傷が口の形をとりはじめ、歯も唇も舌も生えてきて船長に話しかける。それが原因で、船長は気が狂い自殺する。

これらの短篇やマンガは内容的に互いに相当かけ離れているだけでなく、影響関係があったとしても、かなり複雑で入り組んでいるようである。影響関係がはっきりしているのは、「ルクンドー」と「唇」の場合である。それから同じ岡山県出身の横溝と岩井の作品に関しても、影響関係がたどれるかもしれない。岩井の「ぼつけえ、きょうてえ」は、女郎の頭の左に寄生している姉の人面瘡が、その女郎に犯罪をそそのかす話である。横溝だけでなくホワイトヘッドや、娼婦が登場するという点で、谷崎の影響を受けているかもしれない。

さらに想像力をたくましくすれば手塚が横溝の「人面瘡」を読んで参考にした可能性も考えられる。もちろん事態はそう単純ではない。手塚の「人面瘡」には冒頭で、人間ではない両棲類のたたり、昭和14年石川県の志雄村で宮前エイという家の息子がヒキガエルを殺した後、その息子の腹からヒキガエルの頭の吹出物がでてきた例が紹介されている。冒頭の紹介にもかかわらず、その作品はヒキガエルのたたりなどではない二重人格をテーマとした、いわばジキルとハイドの変身譚である。十八人も人間を殺した殺人鬼の顔に、人面瘡が吹き出てきて素顔をおおい隠す。そしてその醜いブヨブヨの腫物が顔をおおっているあいだは、殺人鬼は殺人を犯すことがない、というより人面瘡の干渉により出来ないのである。ブラック・ジャック医師が手術で人面瘡を切り取っても、すぐまた元に戻ってしまう。その人面瘡は殺人鬼の良心が形を取って出てきたものだったと考えられる。しかしこの作品よりも、手塚のもう一つの作品「畸形囊腫」との関連が重要である。双子になるはずの片方が胎内でうまく成長できずに、もう一方の体に吸収された状態で生まれてきて、やがてその吸収された片方が、腫物になって出て来るのである。横溝の「人面瘡」に登場する夢遊病の女性、松代の腋の下に出来た腫物にかんする医学的な原因の説明と、「畸形囊腫」の説明とは非常によく似ている。こうした手掛かりを総合して考えてみて、ようやく横溝と手塚の作品の影響関係が浮かび上がってくるのである。とにかく同名の作品を書いているということはある程度有力な証拠になりうる。だが実際のところ、状況

はさらに複雑なのである。

ホワイトヘッドは「ルクンドー」の影響を受けた「唇」という作品のほかに「カシウス」という作品を書いている。それは黒白の混血児のそけい部から切り取られた肉腫が、二卵性双生児の片方であったという話である。手塚がホワイトヘッドの「唇」及び「カシウス」を読んでいた可能性を完全に無視することはできないが、横溝がこれらの作品を読んでいた可能性のほうが大きいといえる。いずれにせよ作家というものは、どんなにせっぱつまっていようと、粉本をそのまま模倣するのではなく、自分なりの工夫を加えるため、それだけ影響関係がたどりにくくなるのである。

横溝正史には大正から昭和にかけて刊行され、当時海外の最新作品を紹介していた雑誌『新青年』の編集に携わった経験があり、彼は米国のパルプ雑誌にも通じていたはずである。米国の大衆小説に通じていた横溝が、戦後のことであろうが、手塚より先にホワイトヘッドのそれら二作品のことを知って参考にしたかも知れない。そうであればホワイトヘッドの作品を参考にした横溝の「人面瘡」に、手塚が影響を受けたことになる。とにかく呪いやたたりで原因不明の熱病にかかったり悪性の腫物に悩まされる話は世の中にいくらでもある。その腫物が次第に肥大化し、怨みをのんで死んでいった人間の顔や口になり、「ルクンドー」の呪術師のように悪態をつき呪いの言葉を発すれば、たしかに衝撃も強いし怪奇小説としての効果も上がる。横溝正史は作品中で「人面の顔をした肉腫に関する伝説は、日本にも中国にも、古くから語りつたえられている。なかには人面瘡が人間の声で歌ったなどという、奇抜な伝説すらこのこっている」と解説している。手塚も「人面瘡の記録は日本だけではなく外国の文献にも見られる」と書いている。そこで本文では、複雑多岐にわたり過ぎ、不毛の努力に終わる危険性のある影響関係の考察に深入りすることなく、横溝の言う「古くから語りつたえられている」その題材をいかにうまく使いこなし、独自性のある話を展開しているのかに焦点を絞りたい。

## II

田中貢太郎は「人面瘡物語」の冒頭で谷崎の作品の粉本に言及しただけでなく「文学的にはさして意味のあるものでもない」と言い切っている。怪奇小説研究家である須永朝彦も『日本幻想文学史』（1993）のなかで、大正期に限ることわったうえで、「人面瘡」をふくめた谷崎の一連の作品を、佐藤春夫の作品と比較して「出来ばえにおいて相当に見劣りがする」と判断している。谷崎の「人面瘡」にかんする評価は、少なくともこの二人の専門家には高いとはいえないようである。しかし大正時代、当時最先端をいく活動写真（サイレント映画）にまつわる怪異現象を描いたその作品は、現在の観点からみても、最近流行しているホラー小説を先取りしているようなところがあり興味深い。たとえば映画技師Mが深夜人面瘡の映画を一人で見ていて、異常をきたし、やがて気が狂ってしまう部分など、非常に斬新なものであったと考えることができる。ある特定の映画を一人で見ると異常をきたすという内容は、鈴木光司のベストセラー『リング』の、ある特定のビデオを見た者は（この場合は一人とは限らないが）、その影響を受けて死ぬことになるという内容を先取りしているのである。そこでこれまで触れてきた作品のいくつかを比較検討し、とくに谷崎の「人面瘡」が、発表された当時のみならず現在にまでつながる斬新さと独自性を持っていることを、文学的というよりむしろ映像的な観

点から明らかにしてみたい。

まず田中貢太郎の古典的な「人面瘡物語」をもう少し詳しく解説することから始める。浅井了意の『伽婢子』に収められている「人面瘡」には、酒食を好む人面瘡が登場するが、目と口はあるが鼻も耳もなく、男女の性別もはっきりしていない。その腫物は何の感情も表明しないし、きわめて素朴な段階にとどまっている。それに比べると田中の「人面瘡物語」には同じ股に出来た人面瘡であっても、単なる食欲などではない、女の怨念というきわめて人間的な感情を象徴する、進化した人面瘡が描かれている。

幸若舞の家元、幸若八郎が京へのぼる途中、木曾路の山中で、かるさん袴をはいた見知らぬ男に呼び止められる。その男の主人は得体の知れない重い病にかかり、明日をも知れぬ容体になっているが、幸若舞の家元が木曾路を通ることを聞きつけて、「今生の思い出に舞の一手をお願い」したいと、かるさん袴の男を迎えによこしたのであった。得体の知れない病のため、碌を返上して山奥に隠棲しているとはいえ、元は身分の高い武士の今生のたつての願いということなので、幸若八郎は男のあとについて、病人の家を訪れる。隠棲しているとはいえ、屋敷も大きく大勢の家来にかしづかれなかなか風雅に住みなしている様子が語られる。もてなしを受け、舞を披露したあとで、八郎は、病人の股に生えている腫物を見ることになる。それは20年前に、あまりに嫉妬深いため斬り殺された女の「画かれたように生き生きと映って」いる細面の顔であった。

「祈祷でも、医薬でも、削り捨てても灸で焼き切ろうとしても、どうしても消えない」その腫物は、「ルクンドー」に登場する人面瘡と、どうにも始末におえないという点で共通している。このどうにも始末におえないというのが全ての人面瘡に共通する属性かもしれない。ストーンに寄生している魔術師の人面瘡は、いくら切り落としても、次から次へとストーンの体中いたるところ、膝や肩、胸の両側から生えてくる。その人面瘡はストーンと同様にさまざまな言語を喋り、言い争うのである。バルンダ族のその魔術師を、ストーンはかつて一族の目の前で完全に打ち負かし、バルンダ族は魔術師の笛をこわしその破片を彼に与えたことが広く知れ渡っていた。白人がこれまで足を踏み入れたことのないとされているアフリカ大陸の大森林の奥深く、3フィートか、それにも満たないピグミーを求めてやってきた、シングルトンと仲間のファン・リーテンも、その噂は聞いていた。それにストーンは、語り手であるそのシングルトンの同窓生だった。

白人などいそうもないその大森林のさらなる奥地から、ストーンの部下の英国人エッチャムが、助けをもとめて訪ねてくる。隊長のストーンが得体の知れない腫物におかされ危険な状態にあるということであった。助かる見込みのほとんどない人間のために、非常な危険のともなう救助にむかうことをためらうファン・リーテンに、エッチャムはポケットからミイラ化した二つの「大きなスモモより大きく、小さな桃より小さい、ちょうど普通の人の手に隠れるくらいの大きさ」の頭部を取り出して見せる。異常に小さいといえるそれらの頭部は、詳細に調べると子供のものではなく、まきれもなく老衰しかかった大人の特徴をそなえていた。ピグミーのものでもない、二つの頭は、実はストーンの体から生えたバルンダ族の魔術師の人面瘡である。この人面瘡は、頭だけでなく両手が生え、脇腹の肋骨から指の爪の月形まで判別できる。少なくとも生えた部分にかんしては人体の完璧なミニアチュ

アなのである。それを見て二人は出掛けていく決心がつく。

はるばるやってきたシングルトンとフアン・リーテンに、彼は人面瘡をカミソリでいくら切り落としても無駄であり、骨までしみ込んだ呪いを取り去ることはできないと語る。さらに彼は「この呪いは外からかけられたものではなく、この人面瘡同様自分の中から生じてきたものだ」と謎のようなことを言う。だがこの言葉からその人面瘡は、ストーンの良心が顕在化したものであることが分かる。死ぬ直前、彼は魔術師の人面瘡に突然「あの女はおれを許したのだろうか」とたずねる。すると突然英語で話しはじめた魔術師が、「ポンチャルトレーン湖に星が輝くあいだはその女が許すことはない」と答える。それを聞くとストーンは、自ら体を捻って倒れ息絶える。人面瘡は他者の呪いだけではなく、同時にストーン自身の良心の呵責をも表現しているのである。良心を象徴するという意味では、手塚の描く人面瘡と共通している。両作品にエドガー・アラン・ポーの、良心としての分身が登場する短篇「ウィリアム・ウィルソン」が影を落としているかもしれない。谷崎の「人面瘡」はこれらの作品の構図を逆転したような内容である。

怨念を描くということに関しては、谷崎の「人面瘡」も全く同じである。もっとも男にとりつく他者の怨念ではなく、女にとりつく男の怨念であるというところが違う。しかし美しい花魁に笛を吹く醜い乞食の青年が、かなわぬ恋をし、思いをとげられず怨みを残して死んでいくというストーリー自体に新鮮味があるわけではない。

作品の冒頭アメリカ帰りの女優、歌川百合枝は自分が女主人公を演じている『執念』、英語の原題では『人間の顔を持った腫物』という活動写真が、新宿や渋谷あたりのあまり有名でない常設館で上映され評判になり、東京の場末をぐるぐる回っているという噂を耳にする。当時映画館の中心地は新宿や渋谷ではなく浅草であった。その『執念』という作品は、歌川百合枝がアメリカ滞在中、専属であったロサンゼルスにあるグロオブ社の制作によるものだった。ところが不思議なことに彼女には、そんな映画を撮った記憶がまるでないのである。女主人公を演じた本人にその記憶がないということは、確かに謎であり神秘であるが、まったく根拠がないわけではない。それには当時の撮影の方法が関わっている。

同時代の作家のなかで谷崎は、サイレント映画に関するかぎり、おそらく制作画や技術面で、最も豊富な知識をもっていたと思われる。「人面瘡」を発表する前年、大正6年9月に発表した「活動写真の現在と未来」のなかで、彼は演劇と比較しながら映画のもつ将来性に着目し、また当時の日本の映画興行者への不満も語っている。自分は「門外漢」にすぎないと断っているが、外国の映画専門雑誌などを読み、また日活の撮影所などを実際に見てまわった経験もあった。やがて大正9年5月に設立された大正活動写真株式会社に、谷崎は脚本部顧問として加わることになる。

「人面瘡」の中で作者が解説しているように、映画の撮影は筋の展開の順序を追うのではなく、「その時の都合に因って、台本の中から手あたり次第に場面を選んで、前後を構わず写していくのである。どうかすると、或る一つの場所で全然異なった戯曲の中の或る光景を、二つも三つも同時に撮影することさえあって、活動俳優は自分の演じている芝居の筋を知らないでいる例が多い」のである。とくに百合枝の所属していたグロオブ社では、監督が「俳優には絶対に、戯曲の筋を知らせない方針を取っ



ていた」ということである。だから俳優は自分がどういう役を演じているかも分からずに、ぶっつけ本番で監督の指示どおり「泣いたり笑ったりしながら」それぞれの場面を演じていたのである。そうした方針には俳優の間違った解釈を防ぎ、演技から芝居じみた不自然さを取り除くねらいがあったらしい。いわば百合枝は機械の部品である歯車やネジだけを制作する職人のようなもので、機械全体の構造がどうなっているのかは知らされてもいないし、理解することもできなかったのである。グロオブ社で働いていたあいだ、例の『執念』という作品で彼女が演じている花魁や貴族夫人は、何度も演じた経験があり、作品の筋書通り男を翻弄したり殺したり、トランクに身をひそめたこともあった。またその映画では熟練した技師のトリック、焼き込み（画面合成処理）という技術で、腫物になる乞食の顔が彼女の膝に写しだされているので、その点については本人に記憶がないのは当然とも言えた。しかし撮影の時点では分からなくても、完成された映画を後で見たり、筋を聞いたりすれば、たいがい「あのとき写したのが此れであったと、思い当るのが常である」はずである。彼女は自分が出演した映画はどんな短いものでも全部見ることにしていたのに、『執念』のような優れた長尺物を、今まで見たこともなくその存在すら知らなかったのは、やはり謎としかいいようがないのである。さらに不思議なのは、傑作だといわれるその作品が、長いあいだ世間に知られることもなく、いきなり場末の常設館で上映されていることである。ようするに百合枝にとっては、映画の内容のみならず、その撮影、登場する俳優、完成されたあとに日本に輸入された経路、いきなり場末の常設館で上映されている事情にいたるまで、全てが謎に満ちているのである。

映画の最初の舞台は外国船が寄港する長崎あたりで、遊廓にいた菖蒲太夫という花魁が、アメリカの商船の船員と恋に落ちる。アメリカ人の船員は、莫大な身請けの金が工面できないため、花魁を密かにつれだし大きなトランクに入れて故郷アメリカまで密航させようとする。菖蒲太夫が脱出するための手伝いに、彼女に恋焦がれている乞食を使うのである。その乞食は喜んで手助けをするが、その見返りに太夫と一夜を共にすることを許してくれという。船員は承知するが、彼女は醜く汚らしい乞食に身を任せることなど絶対いやだと拒否する。乞食は彼女に呪いの言葉をなげかけ、恨みを残して海に身を投げる。

太夫はトランクに入ったまま商船でアメリカまで密航することになる。トランクに入って脱出する話は現実にもあるし、めずらしいことではない。しかしながら日本からアメリカまでトランクに入っただけでまっすぐ行くとすると、話が全く違ってくる。人間はそれほどの長期間、窮屈なままの閉塞状況には、肉体的にも精神的にも耐えられるものではない。長い航海のあいだ彼女は閉じこめられたまま放っておかれるのである。恋人の船員が航海中太夫の身を心配して、様子を見にいったり、助けたりするシーンもない。この部分はあまりにも非現実的であり、いくら怪奇映画の筋であるとはいえ、というより怪奇映画であるからこそもう工夫欲しいところである。怪異性を際立たせるには、出来るだけそれ以外の部分が現実から外れないようにしたほうが効果的である。

怪談の名手である田中貢太郎が、「文学的にさして意味のあるものではない」と言い切ったのは、このあたりのいいかげんさが原因になっているのかもしれない。田中は情話を得意としていたと言われていたが、たんとんと語っていくその語り口は抑制がきいていて、刺激的で感情的な形容詞を多用す

ることなく、むしろ怪異現象を写實的に描こうとしている姿勢がうかがわれる。

### III

谷崎の「人面疽」は短篇小説であるが、その映画劇の部分では、ありきたりの怨念物語が、当時の最先端の映画技術を駆使して表現されると、いかに斬新なものになり得るかという可能性を探求している。花魁がトランクに入ったままアメリカまで運ばれていく場面は確かに現実性には乏しいが、映像としてはきわめて魅力的で、リアルに感じられるよう描写されている。「活動写真の現在と将来」の中で、谷崎が映画化を推奨しているのは泉鏡花の『高野聖』『風流線』、エドガー・アラン・ポーの「黒猫」「ウィリアム・ウィルソン」といった極めて幻想的な作家の作品である。谷崎の映画にたいする夢は、文字どおり、夢想的な作品で、夢をリアルに映像に表現することにあつたのである。

大正10年3月に発表した「映画雑感」の中で彼は、「いかに俗悪な、荒唐無稽な筋のものでも、活動写真となると不思議に其処に奇妙なファンタジーを感じさせる」と書いている。彼はそこで鏡花やポーの作品のことに言及しているわけではない。また『プラーグの大学生』『ゴーレム』のような、当時彼が傾倒し高い評価を与えていたドイツ映画のことを言っているのでもない。そうではなくたとえはフランス映画で、怪盗が活躍する「ジゴマ」のように、「随分出鱗目な不自然な筋ではあるが、あれ全体を一個の美しい夢だと思えばいい」のだといっているのである。だから少なくとも映画にかんしては、現実的に破綻のない自然な筋の展開をもつ作品を作り上げることに、谷崎はさほど執着していなかったと言える。

アメリカまでの航海のあいだ、花魁は最初から貯えられていたパンと水とで命をつなぎながら、窮屈なトランクのなかで両膝をかかえて、膝頭の上に項を伏せて身を縮めている。何日かたつと、右の方の膝頭に妙な腫物が吹き出し、恐ろしく膨れあがってくる。「さうして、如何にも柔らかそうに、ふわふわとふくれた表面には、更に細かい、四つの小さな腫物の頭が突起し始める」のである。トランクには、空気を通わせるための穴があり、そこからわずかに明かりがさし込み、腫物つまり人面疽の成長していくようすを映し出している。やがてその腫物はだんだんくっきりと輪郭を示すようになり、乞食の顔に似てくる。それに気付いた彼女は恐怖のあまり気を失ってしまう。ほぼ膝頭に当てはまる程度に、焼き込みの技術で巧妙に縮写された、乞食の顔は「生命を吹き込まれたような精彩と形態とを帯び始め」「今や身を投げようとして呪いの言葉を放った折りの、あの憂鬱な、執念深い表情を、すばらしい巨匠の手に依って彫刻された如く、寂然と、黙々と湛えている」のである。

アメリカに着いてからの菖蒲太夫は、まるで人面疽の呪いに翻弄されるような生活を送ることになる。ある晩彼女の膝頭の秘密を発見し、彼女を捨てて逃げ去ろうとする恋人を逃がすまいと格闘するうちに、恋人を絞め殺してしまう。彼女の体にはすでに乞食の怨霊が乗り移っていて、無意識のうちにそれほどの力を出させたのである。ぼうぜんとして恋人の死体を見下ろす太夫の、格闘で裂けたガウンの破れ目から覗いている人面疽は、初めて顔面筋肉を動かし、にたにたと笑う。そのときから人面疽は盛んに筋肉を動かすようになって、喜んだり悲しんだり、舌を出したり、さめざめと涙をながしたりするようになる。またこの頃から、太夫に乗り移り、成長していく人面疽は、彼女の良心を麻痺さ

せ墮落を促進させる、分裂した彼女の人格としての様相をおび始める。彼女は恋人を殺してから「急に性格が一変して、恐ろしく多情な、大胆な毒婦になると共に、美しかった容貌が以前に倍する優婉を加へ、一段の嬌態を発揮するようになって」いる。太夫の美しさを増していく容貌と、いまや彼女の性格の悪しき部分を際立たせる存在となった醜い乞食の顔とが、スクリーンの上であざやかに対比されることになる。

進化した人面痘は、人間の肉体に寄生する他者と考えられるが、それは同時にその人間の分裂した人格を反映するか、もしくは分裂した人格そのものにも成り得るのである。菖蒲太夫が男を食物にする毒婦となり、男性遍歴をかさねるうちに、舞台はサンフランシスコからニューヨークに移っている。彼女は壮麗な邸宅に住み自動車を乗り回し、貴婦人と見紛うばかりの生活をするようになっていく。そして彼女は某国の侯爵青年と恋に落ち、首尾よく玉の輿に乗ることに成功する。しかし紳士淑女を大勢招いた華やかなパーティの席上、満座の中で人面痘の秘密が暴露されてしまう。侯爵夫人となった彼女が踊りに興じている最中、突然真っ赤な血が純白な絹のストッキングに「糸を引いて、点々と床にしたたり落ちる」。それを日頃から夫人が膝に包帯するのを不思議に思っていた侯爵がそばに近付いて見てしまう。するとストッキングを食い破った「人面痘が長い舌を出して、目から鼻から血を流しながら、げらげらと笑」うのである。彼女はその場で発狂し寝室に駆け込むと同時にナイフを胸に刺し自殺するが、彼女が死んでも人面痘は笑い続けている。最後には人面痘の顔が大写しになって現われる。

女主人公の菖蒲太夫役以上に個性を発揮し強烈な印象を与える、この人面痘となった乞食をだれが演じたのが、また謎なのである。歌川百合枝がかって務めていたグロオブ社には日本人の男優は三人しかいなかった。その三人の内のだれかが、長崎のような港湾を背景に乞食に扮して、自分と一緒にカメラの前に立ったことは断じてないと彼女は思うのである。

これまた不思議な偶然であるが、歌川百合枝が日本に帰って新しく就職した日東写真社が、実はその映画を買取り、現在所有していたのである。そこで彼女は、古くから日東写真社に務めていて、外国の映画事情に詳しい高級事務員のHに聞いてみることにする。Hは質問を受けるとひどく狼狽し、部屋の戸を閉めてから次のように答える。

……そうすると、あなた御自身にも、あの写真をお写しになった覚えがないのですね。それではいいよ、あれは不思議な、変な写真です。実はあれに就いて、僕もあなたにお尋ねして見たいと、とうから思っていたのですが、他聞を憚る事でもあり、それに少し気味の悪い話なので、つついとお伺いする機会がありませんでした。今日は幸い誰も居ませんから、お話してもようござんすが、聞いた後で、気持ちを悪くならないように願います

Hは、その映画はグロオブ社から直接買ったものではなく、複雑な経路をたどった後、つまり「支那や南洋の植民地」でさんざん使われた後で、あるフランス人から当社が法外な値段で買い取ったものと説明する。大分傷がつきいたんではいたが、非常に優れた作品で、笛を吹く乞食役の「深刻を極めた演出と云い、腫物になってからの陰鬱な、物凄いい表情と云い」、それに匹敵する俳優は、『プラーグの大学生』や『ゴーレム』の主人公を演じているパウル・ヴェゲナーぐらいしかいないとまで評価

する。『プラーグの大学生』は、好き勝手に悪事を働く分身の話であり、良心としての分身が登場するポーの「ウィリアム・ウィルソン」の構図を逆にしたような作品、つまり谷崎の「人面疽」の構図に近いのである。『ゴーレム』はカバラの秘法により泥人形が生きている人間のように動き出す話で、いずれの映画も怪奇的な色彩が濃厚な作品といえる。

乞食役についてHは、「あの男は此の世の中には住んでいない人間で、ただフィルムの中に生きて居る幻に過ぎない」と言い切る。ここで作者は、非現実な幻を映像において徹底的にリアルに表現したドイツ映画の手法を、見事に応用しているのである。「我等が活動写真館へ行くのは白昼夢を見に行くのである。起きて居ながら夢を味わおうと欲するのである」と、彼が「映画雑感」で表明している自らの考えを、小説の中の映画劇という形を借りて実践したのである。

スクリーンの中にのみ生きている幻の存在であるはずのその乞食は、見ている人間に実際に悪影響を及ぼすのである。その映画について、「夜遅く、たった一人で静かな部屋で映して見ると、可なり大胆な男でも、とてもしまいまで見ていられないような、或る恐ろしい事件が起きる」という噂が立つ。技師Mがフィルムの曇りを修正するため、真夜中ガランとした映写室で、たった一人その映画を見た後からその噂が立ち始める。Mは程なく会社を止めるが、やがて気が狂ってしまう。噂を聞いてかわるがわる映画を見た他の連中も、そのあとで毎晩悪夢にうなされたり、原因不明の病気になったりで、とうとう「あの写真は化物だ」という騒ぎになる。神経質で迷信深い社長も、実験して見た一人であったが、直後に半月ばかり原因不明の病気にかかる、すぐさま秘密会議を開き、もうあんなフィルムは一日たりとも置いておきたくない、至急他社に売却すべきだと主張する。それどころか一時は、主演の歌川百合枝との契約廃棄まで取り沙汰された。しかしその映画に怪異が現われるのは、深夜一人で見ているときに限られるのだから、公開の席で多数の観客に見せる場合はなんの問題も起こらない。だから当分のあいだよその会社に貸そうということに落ち着く。

「或る恐ろしい事件」とは具体的にどう描写されているのだろうか。「事件」といっても多分に心理的なもので、映画を見ている人間の内部で起こるのである。第一巻で笛を吹く乞食が姿を現す瞬間から「胸を刺されるような、総身に水を浴びるような気分を覚えて、或る尋常でない想像が襲ってくる」らしい。第五巻のクライマックスに至り花魁だった侯爵夫人が自殺し、次に乞食の顔が大写しになる場面を凝視していると、大概の者は恐怖のあまり「一時気を失ったようになる」のである。

Hは映画専門家としてその作品に感じていた、いくつかの疑問点を、映画を制作した当のグロオブ社に手紙で問い合わせていた。乞食役をだれが演じているのか、技術的なトリックはいかにして可能なのかといった内容の問い合わせである。すると驚いたことに、グロオブ社から『人間の顔を持った腫物』（原題）という映画を当社で制作したことはないという返事が帰ってきた。しかしそれに似た映画を作ったことはあるので、何者かが、そのフィルムに他のフィルムの断片を交ぜ込んだり、部分的な修正や焼き込みを行なって、偽物を製造した可能性がある。技術的な細部にわたる質問については企業秘密で答えられない。乞食役については歌川百合枝が勤めていたときには、確かに日本人の俳優は三人だけだったが、それ以前に二三人の日本人がいたし、彼女が辞めた後で五六人の日本人を雇っている。彼女が顔を知らないそれらの俳優を、彼女のフィルムに焼き込むことは当社の技術をもって

すれば必ずしも不可能ではない。しかしもし偽物が出回っているとすれば当社としても捨てておくわけにはいかないの、相当の代価を払うから、ぜひその映画を譲って欲しいと書いてきた。

## V

かなり詳細に筋を追いながら解説を行なってきた。しかしそれは月並みで不自然な筋の映画劇を除いた、純然たる小説の部分にかなしては、破綻なく実に綿密に書かれていることを理解してほしいからであった。また当時の小説家としては、おそらく日本では類をみない斬新な方法で、さまざまな趣向をこらし、サイレント映画の怪談を徹底して作り上げようとする作者の意欲が伝わってくる。それは、当時の最新の映画技術を駆使しているだけでなく、当時の技術をすら越えた新しい怪異現象まで描いていることから分かる。グロオブ社にはジェファソンというトリック技術の達人がいた。しかしそのジェファソンでさえ、とうてい不可能な、およそ当時の焼き込み技術などでは対応出来ない場面があると、高級事務員Hはグロオブ社の返事をもらった後でも、はっきり指摘している。それは太夫の指に人面疽が噛み付き、右の親指の根元を歯と歯のあいだに挟んで放すまいとし、彼女の方は五本の指をさかんにもがいて苦しがるシーンである。しかもそれだけではないのである。映画を見ていた技師Mには、かの乞食の笑い声が「突如として極めて密かに、しかしながら極めてたしかに、疑うべくもなく聞こえてくる」のである。

サイレントのはずなのに笑い声が聞こえるという、当時の技術水準をこえていた部分を、作者は怪異現象として描いたのである。これら当時の映像における怪異現象は、現在ではトリックを使えば、いくらかでも実現可能である。すでにトーキーの時代となつて久しいし、またSFX技術の発達した現在の水準からすれば、この「人面疽」という小説に登場する映画『執念』を、作者が想像したよりはるかにリアルに表現することは難しいことではない。つまりかんじんな技術にまつわる怪異が、現在では怪異として全くインパクトを与えることができないのである。そのため、谷崎のこれほどの先見性が、目立たなくなってしまった。

気が狂いかけているMが幻聴を聞いた可能性を検討してみよう。Mは、その声はもしかすると公衆の前で上映されている時にも、聞こえているかもしれないが、だれも気が付かないのだろうと、かなり冷静に思われる判断をHに語っている。だからかなり信憑性があると認めてもかまわないであろう。それにその技師が映画を見ていた時に、気が変になりかけていたかどうかは、たいした問題ではない。なぜならこの作品にまつわる謎や怪異は、今まで述べてきた通り、あらゆる面にわたって何回となく起こり、登場人物のほぼ全員を巻き込んでいるからである。だからすべてを技師M一人の狂気に還元することは、まったく合理的でない。

M技師のみならず夜中に一人で映画を見た人間が全員、病気になったり悪夢にうなされたり、なんらかの悪影響を受けたということが重要なのである。つまり乞食の怨念による呪いは、映画劇の中の菖蒲太夫にとどまらず、映画を見た不特定の人間にまで及ぶのである。これは、本文の始めの方で触れた鈴木光司の『リング』と似ている。『リング』は映画化され、テレビ番組化され、続編の『リング2』の映画まで作られ、ものすごい反響を呼んだ。『リング』では、人数は複数であっても、あるビデ

オを見ると確実に1週間後に死ぬことになる。ただし助かる唯一の方法があり、それはそのビデオを1週間以内にダビングして、だれか他の人間に見せることである。そのような恐ろしいビデオがなぜ作られたのかというと、山村貞子という強力な霊能力を持っていた女の怨念によるのである。怨念という最も古い人間感情に、ビデオというメディアが結びくところは、『人面疽』の乞食の怨念が映画と結びついているのと同じである。山村貞子の怨念による呪いが始末におえないのは、ビデオを見た人間は、一週間以内にダビングして他人に見せなければ確実に死ぬということである。だから生きのびるためそのビデオが次々にダビングされて、世の中にまんえんする危険性がでてくる。この始末におえないという属性こそ、人面疽という腫物のもっとも顕著な属性でもあるのだ。深い怨みからでた呪いはそれ自体恐ろしいものであるが、それが「人面疽」や『リング』の場合のように、呪いを伝達する、映画やビデオという時代にマッチした新しい手段を獲得すると、さらに始末におえなくなり、結果的にますます恐怖が増幅されることになる。これらのことを総合すると、谷崎の「人面疽」は時代を先取りした、映画にまつわる技巧をこらした怪談、というより映画そのものが「化物」となっているところに特徴がある。だからこの作品は今風にいえば（映画化を前提にしている）非常にすぐれたホラー小説として、本来もっと評価されるべきであると最後に付け加えたい。

(かない・こうへい 理工学部教授)